# 海軍従軍絵画通信員・住谷磐根氏の証言

開かれていた。住谷画伯はこの日本画部の委員で、 ことになった。 ユーを申込むと、 住谷磐根画伯が南京攻略戦の話をして下さったのは上野の美術館においてであった。昭 上野の森では、武者小路実篤が始めた大調和展の二十五周年記念展覧会が 絵を鑑賞しながら南京の話をしましょうとおっしゃって、 自身も出品されていた。 美術館で会う 私がインタビ

直接談判して、ようやく認めてもらった。 出発していた。手紙を書くだけではらちがあかず、 早川篤四郎、吉原義彦、岩倉具方の三画伯が第一回の従軍絵画通信員として上海に向って 断されたためである。そこで改めて直接、米内海軍大臣に手紙を書いた。九月八日には小 素封家であったが、長兄(住谷悦治。当時同志社大学教授、のち学長)が危険思想の持ち主と判 軍が従軍画家を求めていると人伝てに聞いた。住谷画伯はぜひ中国に行って描きたいと思 る。受賞しながら反二科会運動を起こしもした。昭和十二年、支那事変が始まった時、 い、さっそく海軍省に志願した。しかし、この志願は簡単に拒否された。生家は群馬県の 住谷画伯は明治三十五年生れで、二十二歳で二科展に入選した。大正十年代のことであ 従軍画家で八人目であった。 結局、 軍務局第四課長の森徳治大佐に

既に第十軍が杭州湾に上陸し、 住谷画伯は三十五歳であった。上海の海軍武官室に着いたのは昭和十二年十一 上海の形勢は急速に変っている時であった。 上海で

ょうど出発しようとしていた砲艦栂に乗り、南京日本領事館のそばに停泊していた出雲にいた時、 海軍武官室の報道部を拠点にして陸戦隊や軍艦をまわっていたが、 南京に向うことにした。 南京陥落間近という話を聞き、 十二月に入って、

#### 一南京にはいつ着きましたか。

でした。上海の黄浦江を出てから南京まで二、三日かかったと思います。 の乗った栂は第十一戦隊に属していましたが、 何かの都合で遅れて上海を発ったよう

砲撃し、しばらくすると板きれなどにつかまった中国兵があっちにもこっちにも流れてき ちを見ておがんでいる兵隊もいました。 百発百中です。寒い冬ですから、そのままにしても死んでしまったでしょう。 ましたので、今度は小銃で射ちました。 ・ル先で、船に乗った中国兵が浦口の方に逃げていくのが見えました。そこで栂はこれを南京に近づくと、遠くで南京が燃えており、さらに近づくと千五百メートルか二千メー 甲板から水面まで四、 五メートルくらいですから 中にはこっ

――南京にいつ上陸しましたか。

「安宅に移った日に上陸したと思います。南京城に行った時、 っぱいたれさがっていたので驚きました。 中国兵はこの縄を使って逃げたのだと思いま 城壁に縄がすだれのように

夜だと思います。その夜はここに停泊し、私は翌朝、第十一戦隊旗艦の安宅に移りました」

南京に着いた時は夜で、栂が着いた下関碼頭の上流には、熱海がいました。陥落の

日の

の縄がありましたか。

「百か二百はあったと思います。城内に獅子山があり、ここに一番近い興中門から私は入 死骸はどのくらいありましたか。 門には中国兵の鉄兜や死骸がたくさんあり、 血ですべりそうになりました」

「数十体はあったと思います。この辺でも戦い はあったのでしょう

静かで、中国人は全然見かけませんし、 「その翌日か翌々日だったと思いますが 城内の様子はどうでした? これを使って城内を廻ってスケッチしました。城内は野っ原や丘があり、 日本兵もあまり出ていませんでした。市政会館や 興中門から入ったところに自転車がありました ずいぶん

馬を外におきますと日本の飛行機にみつけられますから、中においたものとみえます。 参謀本部などに入ってみると、その二、三階は馬屋になっているのでびっくりしました。

来たようでした。私は彼と違って自転車がありましたから、 スケッチができました。 その時でしたか、清水登之が写生しているのに出会いました。彼は私より遅れて南京に あっちこっち行って城外でも

てて日の丸の旗を取り出して振りました。そばまで行きましたら三人の日本兵がい 正体不明の人間に見えたようで、突然、遠くからオーイと呼ばれましたので、あわ 私は毛皮にニッカーボッカーのズボンをはき、肩からバッグをさげていました て、

国兵だと思って射つとこだったと言ってました。中国兵がどこから射ってくるかわ と彼らは恐がっていました。また、死んでる中国兵を四、五匹の犬が喧嘩して食べて 昼に見た犬かどうか、 からな

その日あちこちでスケッチしまして帰ろうとすると、

流行っていた、 V字形に戻って興中門に向いました。その時、中国兵に間違われないようにと、そのころ 大変でした。ようやく犬をまいたと思ったら、あわてたもので朝とは違った門に来たので、 いかけてきたので必死にペダルを踏んで逃げました。なにしろペダルが心棒しかないので 天皇陛下のためならば、 興中門近くに来た時、歩哨の日本兵から、 という歌謡曲のその節だけ気狂いのように歌いま 中国兵だと思って射つとこでし

たと言われました。歌のおかげで助かった次第です」 した。案の定、

南京には相当捕虜がいたと言われてますが……。

画家・写真家の見た南京

その影を追い越しましたが、 ました。道路は建物の影でなければ白く見えますから何だろうと思い、ちょうど興中門で 暗くなって帰ったその日のことですが、興中門近くに来た時、向うに黒 その影というのは中国兵の一団で、 ぞろぞろ歩いて い影が見えてき

で敗残兵を捕えたということを第三艦隊に報告していたらしく、 てやられたのではないかと噂していた、と言ってました。その後、 安宅に戻りますと、参謀たちは食事が終り雑談しているところで、 敗残兵はどうなったかと 参謀室にいると、 中国兵と間違えられ

ると返り血を浴びると言われましたので、それをしおに帰りました。 る気も失せてしまいました。 日本兵は二十人ほどで、 まして、ここに四、五人ずつ並べて後から銃剣で突いてコンクリートに落としていました。 きました。行くと、 無線の問い合わせが来てました。その敗残兵とは、先ほど見た中国兵だったらしい そのうち一人の中尉が試し斬りをすると、軍刀を持っていこうとするので私もついてい 埠頭の突端に鉄の柵があり、そこから先はコンクリートで護岸されて 中国兵が千人弱いました。それを見ていた中尉は、 私が懐中電灯をつけて見ていましたら、 兵隊から、 試し斬りをす

流れてしまいます。これがあとで南京虐殺と言われたものだと思います」 る者もいました。 ほどの死体がありました。中には死にきれずに手を動かしている者や、 していませんでしたが、増水すれば護岸コンクリートぎりぎりのところまで来ますから、 早く起きて行ってみると、 銃剣で後から刺すだけですから死なない兵もいます。揚子江はまだ増水 コンクリートの上は死屍累々で、数えてみると八百人 ごそごそ動いてい

敗残兵を捕えたらどうするか、決まっていなかったのでしょうか。

になったと思います」 「言いたくないことですが、兵隊は戦友がやられていましたからやってしまえ、

他に方法はなかったのですか

日本軍は南京に向う時、 この時とり残された中国兵は後で日本軍を襲ったりしてます。 一気に進みましたから、途中相当の中国兵を追い 翌年の三月、 越して 私が無 いきま

をわからなければ一部分を取り上げても間違 は再び日本軍と戦っています。ですから日本軍としては中国兵を殲滅しなけ 錫にいた時、 いうものです。 それが戦争ですし、そうしないと今度は日本軍がやられてしまいます。そういう全体 助けに行きました。また、 太湖にいた日本軍が一万人の中国兵に包囲され 南京から揚子江を渡って逃げた中国兵は四月の徐州作戦に いになります。南京虐殺と言われるのもそう たというの で豊橋の部隊が急 ればなりませ

重な遺跡があり、これは守らなくてはいけないと言ってましたが、九江や武漢三鎮などに 私自身もそういうのを何度も見ています。長谷川(清中将)司令長官は、揚子江沿い 相当悪い兵隊だけで、それはパール・バックの『大地』に書いてある兵隊のとおりです。 行った時、 南京城で最後に戦った中国兵は精鋭で、これらはたいてい 決まって中国兵は遺跡に逃げていました。中国兵はそういう兵隊なのです。 戦死し てい ます。 0 には貴

ていた南郷、潮田、和田などの航空隊の連中に差し上げました。航空隊も食べ物は十 ので断わると、 あの頃は食べ物もなかったから、 持っていって下さいと言うので、もらっていって翌日、 甘党なら羊羹、辛党ならウイスキー、と出されましたが、 他に方法はなかったと思います。 南京の飛行場に来 食事の後だった 安宅の参謀

はありませんでしたから、喜ばれました。食べ物があったのは海軍の軍艦だけです」 -その他処刑などはありませんでしたか。

画家

上にあったというも

のである。

市民は城内で一カ所にまとまっていたと言われていますが……。

た人たちばかりです。ここは厳重にほかの中国人も入れないようになっていました。 日本軍が南京に攻めてくるのを知って残った人ですから、日本軍に殺されてもいいと思っ てみると、市民がたくさんいました。中にいる中国人は南京を逃げきれなかった人たちで、 えるようなところに『避難民区域』と大きく書いた看板があるのを発見しましたので行っ 「そうです。最初は全然中国人を見かけませんでしたけれど、四、五日したら遠くから見

見てません」

自転車でいろいろなところをスケッチして相当描きましたけれど、

虐殺というのは一度も

南京に残った市民は避難民区にいましたし、兵隊は逃げてほとんどいなかったと言

ま

ですから南京で虐殺があったと言われていますが、ありえないことです。私はその後、

入城式もご覧になりましたか

「入城式も慰霊祭も出ました」 いつまでいましたか。

署名してもらいました。これは戦後、東郷神社に納めました。 「第十一戦隊がしばらく下関にいましたので、私は各艦に行き、 艦長や副長などに色紙に

という漫談家が一緒で、楽しませてくれました。翌九日に出雲の長谷川司令長官に挨拶に 年が明けて一月八日に上海と南京間の列車が動いてましたので、これで上海に戻りまし 途中に残敵がいるというので窓を全部閉めて行きましたが、慰問に来ていた松井翠声

亜戦争勃発後は昭和十七年に大佐相当待遇嘱託になり、 帰りました。 この後、住谷画伯は再び中国に渡り、大東亜戦争が始まるまで中国で絵を描 中支には六カ月いたことになります」 南方に行っている。

上海に戻ってから今度は海軍の砲艇隊と一緒に太湖に行き、

日本には四月に

ったが、 上野の美術館での住谷画伯の話は四時間半に及んだ。住谷画伯は八十四歳にもかかわら 疲れを知らず、 住谷画伯は夕食の支度があるというので日を改めることにした。 四時間半話してもまだ話は充分に終っていない。私ももっと聞きたか

いることを納得できないだろうからと、 住谷画伯は、南京のことだけを話すと誤解をまねきやすいし、巷で南京事件と言われて 四時間以上の話の大部分は、 当時の海軍の様子から話されこの時間にな 戦場というもの、 それに南京戦は上海戦の延長線 ったも

# 外務省情報部特派カメラマン・渡辺義雄氏の証言

ドイツで学んできた名取洋之助が、 那事変が始まると、 昭和十一年になり、 昭和初期は新しいカメラマンが陸続と生れた時期である。報道写真という言葉が生まれ、 アメリカで写真雑誌『ライフ』が創刊され、爆発的人気を呼んだ。 写真は報道の重要な手段としていっそう注目を浴び、 昭和九年、英文グラフ誌『NIPPON』を創刊した。 兵隊たちの間で

伊兵衛らと並び、新進のカメラマンとして名をなしていた。 はカメラが人気の的になった。当時、 渡辺義雄氏は三十歳であったが、

兵衛氏と渡辺義雄氏である。 フィルムに収めることにした。この撮影隊の写真カメラマンとして選ばれたのが られ、その方法として写真とニュース・フィルムの撮影隊を組織し、上海・南京の様子を 事変が始まるや、反日をあおり、支那に同情をひくような写真を世界に流し、これが成功 していた。このため、外務省情報部では支那事変の実態を外国に知ってもらう必要にせま その頃、支那は様々な宣伝方法により国際世論を支那に有利に導こうとしていた。

とめている。渡辺氏は顔も体も丸々としているが、人柄もそうである。 を受賞した。その一方、昭和三十三年には日本写真家協会会長になり昭和五十六年までつ 学で教えると共に「桂離宮」「伊勢神宮」など建築物を撮り、「伊勢神宮」では毎日芸術賞 氏らと国際報道写真協会を設立している。戦前の代表作に「文楽」がある。戦後は日本大 てきた。一カ月にわたる撮影旅行である。この間、渡辺氏は二度南京に行って撮影した。 渡辺氏は明治四十年生れ。昭和八年に二十六歳で個展を開き、昭和九年には木村伊兵衛 一行は十二月十二日、長崎を出発、上海、南京を撮影して、翌年一月十四日長崎に戻

ては現役である。 う。そのため、 現在、日本写真家協会の名誉会長をつとめ、写真界の大御所であるが、 時には額に指を当てながら思い出して話してくれた。 写真の話ならよくするが、南京のことはめったに話したことがないとい カメラマンとし

という世論がアメリカに起こり、 カの新聞に載り、 「支那事変が始まるとすぐに、上海の停車場で泣いている中国の赤 撮影旅行の目的はどのようなものですか これがずいぶん話題になりました。日本はひどい、こんな子供までも、 これがきっかけでアメリカはそれまで以上に中国に ん坊の写真が、

日本に敵対するようになりました。

期だったので、ずいぶん効き目がありました。 題になりました。 人で泣いている写真にしたものです。それがどういうルートかアメリカに持ち込まれ、 ていたのか、 ところがこの写真は、もともと泣いてる子供を抱こうとしていたのかそこに置こうとし 父親らしい大人がそばにいたものですが、父親をブラシで消して赤ん坊が一 またその頃はこのような衝撃的な写真はありませんでしたし、 戦争の

日本大学で報道写真について教えていましたから、このことは印象的でした。 す。修整の技術は大正時代からありましたから、よく見ればわかるはずです。 戦後になって、アメリカの写真雑誌が、父親も映っているオリジナル写真を載せていま 私は戦後、

た。 に、宣撫班が難民を救済しているということがありましたので、 かってもらうため、写真と映画を撮って、それを世界に配布しようということになりまし 特にアメリカに聖戦の実態を知ってもらいたいということでした。 中国はこういう謀略をよくやっていました。それで外務省も、 私の仕事はそういう場面 聖戦の実態の一つ 本当の日 本軍をわ

長となって、 が世話役になり、 人でしたから、 以前 チェコの臨時代理公使をやって 上海と南京に行くことになりましたが、小川さんは芸人で、 楽しい旅行でした。 カメラマン二人、 情報部で写真などを扱っていた事務の後藤光太郎さん 映画撮影技師二人の計六人で行きました」 いて、 その頃は情報部にいた小川昇一等書記官が団 浄瑠璃もうなる

当時の記録には十二人ほどで行ったというものもありますが……。

ルムは中山さんという映画会社の方ともう一人でした。 「たしかこの六人だったと思います。カメラマンは木村さんと私の二人で、 当時の写真を見てもそうです」 ニュー スフ

て揚子江を行きました。 「上海に着い すぐに南京に行ったのです てその日は旅館に 西条八十なども一緒で、 一泊し、 か。

次

の日に南京に向っ

たと思

心います。

掃海艇に

他にも多くの従軍作家や従軍画家が

いま 0

「掃海艇で一晩過ごし、 南京に着いたのは 11 翌日、 つです 南京に着い たと思い ます。 日にちがはっきり

しません

入城式の一日か二日位前ではなかったでしょうか」 下関に着いたのですね?

「そうです。 トル先で首斬りをやっているから見ない 間もなく川が赤くなる、 下関に着きましたら、そこに とも言ってました。 か、 いた兵隊がわれ JII べりで斬って川に落として そう言われましたが、 わ 九 三百 「メー いる、 木村さんは死 ルか五百メ と言う

ないと言い

、そのままになりました」

ませんで

体を見るのも嫌な人です

か 5

見

たく





日本軍の爆撃を受けた瓦礫のなか、 ひとりぼっちで泣き叫ぶ赤 だが、別のカット(「20世紀の歴史15第2次世界大戦(上) に掲載された (左)。 戦火の舞台 J・キャンベル編、平凡社)では子どもをそこに連れてきたらしい大人が

いと言い

1) ませ

横にいる(右)。 ますと、 とも、 んので、 でした。 小川さんなども行こうとは言いません 「ええ。実際赤くはなりませんでした 「私もそういうのは好きではあ するとか 今考えると、たとえ写真に撮らなく そう言ってました」 渡辺さんは見ようと思い 川が赤くなると言ってましたか。 報道者として、 木村さんが見たくな 一人で行く気もありませんし、

けと見るのではずいぶん違いますから。 ていたらよかったと思います。 カメラマンの中には犯罪を撮って糾 暴露の記録を撮るという 見るだけでも見

――斬ることは公然と行なわれていたのですか。

す。兵隊たちは、ざまあみやがれとか、せいせいした、仇はうったと言ってました。 兵隊たちは戦友がやられて復讐心が強かったので、斬るのは当然だと思っていたと思いま 「その兵隊は、見ませんか、撮りませんか、 と言ってましたから、 全然隠していません。

残虐なことをしているという気持はなかったのですね。

と思います。 「兵隊たちは、 残虐とか虐殺という言葉は、戦後使われるようになったのです」 仇をうった、怨みをはらした、という気持ですからそういう気持ちは

――斬っていると聞いてどう思いましたか。

持を聞くと、さもあろうと思いました。残酷だと思いつつも、 「前の日、 私も上海で、大場鎮の激戦の跡を見ていますから、 南京では兵隊のそういう気 もっともだなと思いました。

中国兵が斬られるのは戦争での当然の刑罰だと思いました」

斬られた中国人は捕虜だったのですか。

捕虜をつかまえて南京にある監獄に入れたが入りきれないし、 むをえずやったと言ってました。二人は、私に、それではどうやって食わすのだと言って ました。それを聞いて私はしょうがないなと考えました」 「翌日か翌々日に南京城内で将校と下士官の二人がいましたので、いろいろ聞きますと、 食べさせる食糧もない、

―どの位の数の捕虜がいたのでしょうか。

犯罪人をやったのか、捕虜はどの位その巻き添えをくったのかはわかりません」 「捕虜と犯罪人で一万人位いたと聞きました。そのうち何人かをやったということですが 南京に着いた日はほかに何か見てますか。

ういう人が略奪したのでしょう」 います。金を持っている中国人は既に逃げて、 「街にある店は戸が開いて、ケースの中は空っぽでした。中国人が持って逃げたのだと思 金のない人だけが残っていましたから、そ

―日本兵ということは?

こを宿舎として使っていました。 「日本人が略奪したのではないと思います。 日本兵は町にある家は空っぽでしたので、そ

に入れてやるものがあります。実際は使えません。こういうお札がばらまかれてありまし また、私もその時知ったのですが、中国には葬式用のお札といって、死んだ時一緒に棺 中にはそれを知らないで大事にしまっている兵隊もいました。

ころが、大使館に食糧がなかったので、小川さんが知っている部隊長のところに行きまし その日は大使館に行き、中国人が三人管理してまして、ここに泊ることにしました。と そこからもらってきました。 われわれは南京に行けば食糧はあると思っていました。

行ってみると、兵隊たちは飲まず食わずで入城しています。われわれは上海から自分たち の食糧を持ってくる気になれば持ってこれましたので、その時は持ってくればよかったと

上海から領事館員が来ていませんでしたか。

われわれ一行のほか

いなかったと思います。

いたのは雇っている三人の中国人だ

けだった気がします。 次の日の朝、 難民区の女の人が、 日本兵が女を連れ ていった、 とわれわれに訴えに来ま

大使館に二日泊ったと思いますが、二日とも同じ訴えがありました。

――日本兵の残虐行為を直接ご覧になってますか。 て複雑な気持でした」

兵隊は食うや食わずで来てますから、

部隊長に言ってもしょうがないし、

その話を聞い

「日本兵が実際残虐行為を行なっているのは見たことがありませ

血は流れていませんでしたが、それは凄かったです。見ただけでもびっくりしました」 を斬られた中国兵と首を後から斬られた死体が二、三体ありました。 大きい通りの交叉するロータリーの中央に植込みがあり、 顔はどす黒く、 この植込みに、 眉間 もう

「私が直接見た死体とい いうのは 口 j 1) の死体だけです」

そのほかにはっ

限られてました」 「中山陵に行きました。 南京ではどこに行ってますか。 市内はあちこち歩き廻りましたが、 車はありませんから、

――写真はどのようなものを撮ったのですか。

を配給したり、 領するとまず難民を助けなければと考えてましたから、 難民区に行って、日本兵が難民に食糧をやっている場面などを撮りました。日本軍は占 慰問袋を手渡したりしていました。私はそのような場面を撮りました」 南京の難民区でも一人ひとりに米

たのですか。 さきほど、 女の人が連れさられるという訴えがありましたが、 難民区は落ち着い てい

こっそりやる兵隊が何人かいるのでしょう」 のを撮りました。われわれカメラマンは入れましたが、 一昼は何もありません でした。係の日本兵と難民が、よく話もしてましたので、そういう 一般の兵は入れませんでした。

――入城式も撮りましたか。

撮りました。こ 松井大将が入城してくるのを撮り の時、 朝日新聞の小島(忠郎)カメラマンと会ってます」 りました。 私が中山東路で木村さんが国民政府の式場で

――南京にはいつまでいました?

画家・写真家の見た南京

敵意を持っていないのです。この戦争を、日本軍と蔣介石の軍が戦っているだけだと言っ てましたが、 んの知り合い 「入城式の写真を撮って、 ブリッジの近くの、 共同租界の中国人も戦争はまるで関係ないというふうでした。 の中国人に一度招待されたことがあります。 毎日新聞の記者たちもいたホテルに泊りました。 次の日には上海に戻ったと思います。 いわゆる大人で、日本人に全然 上海に戻ってからはガー 上海では小川さ 街は賑わって

第三章

287

この時木村さんは上海に残り、 いて、南京に行くというので、 正月になってからまた南京に行ってます。その時は河相(達夫)情報部長が上海に来て 小川さんと後藤さんと私の三人だけで行きました。飛行艇 一緒に楊樹浦から海軍の飛行艇に乗って南京に行きました。

に乗ったら、とても寒かったのを覚えています」

「撮りましたが、特に何かを撮るために行ったということではありませんでした」 その時も南京を撮ったのですか。

その時の南京の様子はどうでした?

「部隊はほとんど南京から去っていましたので、 また、難民はまだ難民区にいました。 中山陵の方からたまに鉄砲の音が聞こえる位で、 撮るような兵隊は いません でした。

撮った写真はどうしたのですか。

敵もほとんどいなかったようです」

聞きました。その頃にはアメリカの対日感情がはっきりしてましたし、 かっている写真ですから、それは当然だと思います。 「写真は三月に三越で『南京 各国の外務省や『ライフ』などの雑誌にも送りましたが、 上海報道写真展』をやり、相当賑わったようでした。 一つも載らなかったとあとで 日本が撮ったとわ

私の撮った写真は昭和二十年三月九日の空襲で全部焼けました」

以上が渡辺義雄氏の証言である。

### 小柳次一氏の

土門拳だけで、ちょうど藤本四八が入る頃であった。 本工房に行くことになった。名取洋之助はドイツから帰ってから報道写真の重要性を説き、 日本工房を作り、海外への日本紹介誌『NIPPON』を創刊していた。スタッフはまだ (現在の日本経済新聞) 昭和十二年三月、 の部長をしていた和田日出吉から名取洋之助に紹介され、そこで、日 フリーのカメラマンとして活躍していた小柳次一氏は、中外商業新報

を説いたが、軍では名取洋之助の話に理解を示さなかった。そこで上海に行き、ここで同 助は日本の立場から支那事変を報道せねば、と主張した。名取洋之助は軍中央にそのこと まもなく、支那事変が起こり、ちょうどその頃欧米での日本の報道を見てきた名取洋之

こで日本工房が撮影を担当することになった。 じ主張を繰り返し、 上海派遣軍司令部で宣伝を担当していた金子 (後治) 少佐を説得し、 さっそく名取洋之助と小柳氏が上海に行く

当時の身分というのはどういうものでした?

ことになった。小柳氏三十歳の時である。

報道の重要性を説いて、 で上海の軍の特務部の諜報班で対支宣伝をやっていた金子少佐のところに話に行き、 初名取が陸軍と海軍に話にいった時、 金子さんを説得したのです。陸軍の部隊長の中には従軍記者はい 軍の反応は木で鼻をくくったものでした。

第三章

噂などは?

嘱託にしてもらい、自由に撮影できるようにしました。無給といっても実際は軍の機密費 いという人がいたくらいですから、正式の軍属だと命令に拘束されて困るので、

分は特務部の報道班で、日本工房の社員でもあった訳です。 から小遣いをもらっていました。そういうことは全部名取が決めてきました。ですから身 名取は当時世界で名前の売れていた唯一のカメラマンでしたので、 撮った写真は名取の

名前で世界の写真雑誌、新聞社、 しばらくして撮った人の名前で発表することになり、昭和十三年三月頃、 出版社に売込みをしました。

を処刑した時の写真は私の名前で『ライフ』にも載ってます」

南京にはいつ行ったのですか。

海に着きました。 「名取が話をまとめてきたので、 従軍のやり方など何も知りませんし、すべ さっそく名取と私が昭和十二年の暮に発って、 てが初めてでした。 元旦に上

寄って南京に着いたのはたぶん四日の夕方だと思います。南京駅のところに着きました」 南京が陥落したばかりでしたので南京に行くことになり、 二日に上海をたって、蘇州に

南京の様子はどうでした?

と思いますがそこから入りまして、入ると右側に大きい木の中国軍の慰霊碑が建っていま 「南京に着いて最初に目についたのは城壁に縄がさがっていたことです。 私が行った時は死骸はなかったのですが、 陥落時に門の近くは死骸の山だったそう

0 着いた晩放火がありましたが、 その死骸 は大変だったら 便衣隊がやっているようでした。 L V のです。

軍艦は弾のあるかぎり射ったと言いますし、

日本軍からみれば敵と遭遇したので射

撮ろうとしましたが門に日本の衛兵がいて、ここは誰も入れたことがない、と入れてくれ 子を見かけませんでしたが、難民区の中の金陵女子大学には若い女性がいました。写真を ぞれ落着いた生活をしていました。その頃、難民区にいたのは二、三万で、町に若い女の ませんでした。また、日本の商人というのは凄いですから、 翌日から早速私はカメラを持って撮りました。中国人は戦争慣れしていますので、 日本軍の残虐行為を見てませんか。 早速上海から来ていました」 それ

「南京は落着いていて、見たことはありません

後言われているような話は聞いたことがありません。 したという話を聞いたことがあるが、戦場だからそういう話はいくらでもありますし、 「虐殺という話は聞 いたことがありません。揚子江の方で三百人殺したとか、

まっていたと思います」 私はその後本格的に従軍して徐州、漢口など前線に行って写真を撮ったが、南京という 日本兵の暴行がなかったとは言いませんが、 そういうことをやる兵は決

南京では名取さんも一緒でしたか。

「名取は上海と南京の間を行ったり来たりしていました。 一月末には自動車隊と南京に来

欧米では宣伝報道が行なわれて、やらせもあり、 てました。 名取は欧米での日本の報道に驚いて、 自分の体験としてその必要性を肌で感じ このままではいけないと言っていました。

たのでしょう」 有名な上海での赤ん坊の写真などがありましたね。

連軍のカメラマンに、あの写真を撮ったカメラマンがいましたのでそのことを言いました 「そう。『ライフ』に一頁大で載って有名になった写真です。世界中に有名になりました。 戦後になって朝鮮戦争の時、京城に世界中の報道カメラマンが集まりました。そこで国

よ。 ワンとかいって中国系のカメラマンでね、私より年上でした」

撮りますし、やらせが世界中でありました。 「もちろんありのままを写真で報道するのですが、 報道写真といっても、ありのままの報道ではないのですか。 カメラマンは自分の国の立場で写真を

ってきたカメラマンだが、キャパのスペイン戦士の写真をどう思うか、と聞かれましてね」 戦後、アメリカ軍が日本に来てすぐ、アメリカ人から、 小柳、おまえは戦争をずっと撮

たらしく、それで私に聞きにきた訳です。私も自分の経験からああいう写真は撮れないの ていました。 ではないかと思っていましたので、そのことを言いますと、おまえもそう思うかと納得し 「そうです。アメリカのカメラマンの間では本当に戦場で撮られたものか話題になって あのロバート・キャパの有名な写真ですか。 特にアメリカ人というのは撮られるのがうまいでしょう。 よくポーズをとっ

たり。 でやらせというのがあり、それが話題になって いたからだと思います

キャパの写真は戦争中から疑問視されてたのですね。

「そうだと思います」

「戦場だから死体はあると思います。それを言ってるのではないですか。南京にずっとい 南京事件については今でもいろいろ言われてますが……。

た体験からそう思います。

思います。例えば、中国兵は日本兵を蜂の巣のように刺し殺しています。もちろんみせし めもあるでしょうが、ああいうのは日本の感覚じゃないですね。 戦場のことを今言っても仕方ないことですが、日本兵が特に残虐だということはないと

をあげていました。戦後、アメリカ兵も日本に来てチョコレートをくれましたが、 を轢いたと平気で言うのですよ。それを聞いて皆が、この野郎、と言ったことがあります。 リカの戦車の兵士からわれわれ報道班がいろいろ話を聞いていますと、死んでいる日本兵 戦後になって思ったのですが、 アメリカも比島攻略作戦の時こういうことがありました。バターンで捕虜になったアメ 日本兵は中国の都市を占領した後、よく中国民衆にもの 日本兵

れてやるという態度で、なついた日本人はいません。 朝日新聞の本多(勝二)記者が日本が南京で悪いことをやったと言うが、それは戦争で いとおしんで物をあげており、なつく中国人もよくいました。しかし、アメリカ兵はく

第三章

はよくあることで、 それを言ってるだけでね、 戦争を知らないから言えるんですよ。

芥川賞を杭州に持ってきた時一緒だったことがあります。 最近も『南京への道』を書いてますが、私は目が悪くてめったに本は読めないが、 火野葦平が生きていれば面白い論争になったと思いますよ。火野とは小林秀雄が いかずに、少しずつ読んでいます。『南京への道』は火野葦平が従軍したコース

イデオロギーで事実をゆがめ、それがまかり通っている世の中になっています

本格的に外国へ写真の提供をするようになった。小柳氏もそのまま中国での仕事を続けた。 かげで報道部ができた。日本工房も上海にプレス・ユニオン・フォト・サービスをつくり、 大東亜戦争後は海外へのアピールの必要もなくなり、 まもなく軍は報道の重要性を認めるようになり、 また、 報道写真から記録写真に重点をおく 中支派遣軍 の馬淵逸雄中佐のお

失明に近く、 小柳氏は戦後もカメラマンとして活躍した。小柳氏から最初葉書をいただいた時 ほとんどけんとうをつけて書きました」

ようになっている。

しばらくして意を決して申込むと了解してくれた。 という葉書をもらった。 それで、うかがって話を聞くのはいったんあきらめたのだが、

になり、九州で特攻隊の写真を撮ったが、その人たちの霊をなぐさめたい気持があったか らのようだ。 小柳氏は宮崎県の川南町に住んでいた。五十年以上東京、鎌倉に住んでいたが、 宮崎の知人から来るように薦められて、ここに移っている。移ったのは、 既に七十九歳であるが 年に一度は上京し、 旧交を暖めているという。 終戦近く 十年ほ

#### 第四章

# 外交官の見た南京

……佐々木少将は陸軍きっての中国通で、蔣介石以下国民党領袖のほとんどと親しく、国民党の革命にもよく理解を示していた。中国に愛情の声の東京を最も正しく伝えているのではなかろうか。私は南京虐殺と言われているのではなかろうか。私は南京虐殺と言われているのではなかろうか。私は南京虐殺と言われているのではなかろうかとも、聞いたこともなかった。南京ではいろいろあったと言われているが、佐々木少将は陸軍きっての中国通で、蔣介

(領事官補・岩井英一氏の証言より)



南京中山路あたり。どこで入手したのか、馬車に日の丸旗を立て、中国人を乗せて 走る日本兵(昭和12年12月23日)